

郷土の発展を目指して 藤井 能三

富山県初の小学校を創立 日本海側初の西洋式灯台を設置 伏木港の築港工事を呼びかけた

1846 (弘化3) 年11月9日—1913 (大正2) 年4月20日



裕福な回船問屋の長男

能三は江戸時代末期の1846 (弘化3) 年に射水郡伏木村 (現高岡市) で、能登屋という回船問屋の長男として生まれました。伏木には北前船と呼ばれる日本式の帆船の船着き場がありまし

た。藤井家は北前船を何そうも持ち、米などの品物を運ぶ商売に成功していました。能三は12歳のとき、伏木沖をゆく大型の汽船 (蒸気船) を初めて見て、北前船との違いに驚きました。



藤井商店 (高岡市立博物館提供)

汽船を伏木港へ迎えたい

能三が父の三右衛門から、先祖代々の家業を受け継いだのは18歳のときでした。22歳のとき、仕事で神戸に来た能三は、神戸港が多くの汽船でにぎわう光景を見て、ショックを受けました。「帆船しか入れない伏木の港は、新しい時代から取り残されてしまう」このころは、海が荒れる冬には

帆船を出せないため、富山県で秋に収穫した米は春にならないと積み出すことができませんでした。能三は伏木港に汽船が来るようにして、富山県の産業を発展させたいという夢を抱き始めました。

藤井商店が宣伝に使った「引き札」というチラシ。簡単なカレンダーが入っています。(加賀市北前船の里資料館蔵、高岡市立博物館提供)



伏木港に汽船が入港

汽船が入れるよう、能三は伏木港の海底の土砂などをさらって深くすることを呼びかけましたが、人々は賛成してくれません。まずは新しい考え方を学んでもらう必要があると感じた能三は、自分の家を校舎にして1873 (明治6) 年2月、富山県で初めての小学校を創りました。教師の給料や教科書も能三が用意しました。当時はまだ珍しい地球儀を使って地球が回っていることや世界が

広いことを教えました。当時の寺子屋とは違い、英語など最先端の学問が学べるということで、児童は伏木だけでなく、周辺の町村からもやってきました。この3年後には、「女子にも教育が必要だ」と考えた能三は、藤井女児小学校を開きました。自分の財産を地域のために使う能三の姿を見ていた周囲の人々の中には、能三に協力しようという人が次第に増えていきました。



大成小学校の図。伏木小学校は開校した翌年、西洋風に改築し、大成小学校と改名しました。(高岡市立中央図書館蔵、高岡市立博物館提供)

新しい夢の実現に向けて

能三は日本一の船会社の社長である岩崎弥太郎に、汽船を伏木に寄らせるよう頼みました。岩崎は「たくさんの荷物を集めること」と「灯台を造ること」を条件に、汽船を伏木に行かせると約束しました。

能三は荷物集めに走り回り、自分のお金で西洋式の伏木灯明台を建てました。こうして汽船が伏木に入港したときには、たくさんの見物人が港に集まりました。

その後、県内で初めての汽船会社を創った能三の胸には「ロシアのシベリア鉄道を利用して、日本の産物を伏木港からヨーロッパへと運ぼう」という新しい夢が生まれました。

そのために1891 (明治24) 年には『伏木築港論』を発売。伏木港にもっと大きな船が入れるよ

うにしよう」と呼びかけました。努力が実り、1900 (明治33) 年に伏木港とロシアのウラジオストク港の間に定期航路が開通されました。大きな汽船が横付けできるようにする港の工事と庄川の改修工事もありました。

能三の夢の港が完成し、その祝賀会が開かれたのは、能三が1913 (大正2) 年4月に66歳でこの世を去ってから半年後のことでした。



帆船と汽船が入港した明治中期の伏木港 (高岡市立博物館提供)



伏木灯明台は1877 (明治10) 年に建てられた日本海側初の西洋式灯台です。(高岡市立中央図書館蔵、高岡市立博物館提供)

夢や志をかなえたポイント

- みんなのために、自分ができていることを考える
- 約束は実行する
- 自分の考えを理解してもらう方法を考える

豆知識 能三は船の安全のために海の天気を観測する測候所も作り、自分で天気予報もしました。

1846 (弘化3)	0歳
射水郡伏木村に生まれる	
1864 (元治元)	18歳
家業の回船問屋を継ぐ	
1873 (明治6)	26歳
富山県初の小学校を伏木に創設	
1877 (明治10)	31歳
伏木港に灯台を建設	
1878 (明治11)	32歳
天田峠の道路工事を完成させる	
1883 (明治16)	37歳
富山県の分県に協力	
1885 (明治18)	39歳
高岡米商會所を設立	
1886 (明治19)	40歳
経営していた船会社が倒産	
1891 (明治24)	45歳
『伏木築港論』を著す	
1893 (明治26)	47歳
中越鉄道会社の設立に参加	
1913 (大正2)	66歳
亡くなる (葬儀は町葬で行われる)	

コラム 財産をなくしても、郷土のために働いた能三

1886 (明治19) 年ごろからの不景気の影響で、能三の会社は次々と倒産し、北前船で築いた財産をすっかりなくしてしまいました。伏木の人たちは能三を助けようと考え、たくさんの利益が出そうな庄川改修工事の責任者に就かせました。工事が終わってから、使われたお金の内訳を知った地元の人たちは驚きました。能三はほとんどお金をもらわずに、郷土のために働いていたのです。



伏木外港 (平成19年7月撮影)。能三の夢のとおり、伏木港を含む富山港からさまざまな品物が運ばれています。